

学生海外調査研究	
近代日本における陶磁器輸出と米国市場	
今給黎 佳菜	
比較社会文化学専攻	
期間	2010 年 8 月 30 日～2010 年 9 月 25 日
場所	アメリカ合衆国（ボストン、セイラム、ハートフォード、スプリングフィールド、ニューヨーク、フィラデルフィア、バルティモア）
施設	ボストン美術館、ピーボディ・エセックス博物館、ワズウォース・アセニウム、ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス美術館、メトロポリタン美術館、フィラデルフィア美術館、ウォルターズ美術館、ボストン公共図書館、ハーヴァード大学ファイン・アーツ図書館

内容報告

1. 研究概要と本調査の目的

報告者の研究テーマは「近代日本における陶磁器輸出と海外市場」であり、博士論文では海外の輸出先市場が日本陶磁器業発展に何らかのインパクトを与えたことを、経済史・美術史両分野のアプローチから包括的に実証することを目標としている。これまで報告者は、日本国内の陶磁器業発展という視点から、輸出向け陶磁器生産システムがどのように形成され発展していったかを、修士論文「輸出向け陶磁器生産システムの形成と段階的発展—欧米市場情報受容のプロセスから—」で明らかにした¹。よって次の段階として、海外側の視点から、日本の輸出陶磁器に対して欧米ではどのような需要と市場構造が存在していたのかを分析したいと考えている。最終的にそれが日本側の技術的発展や大量供給を導き出したという連関性を明らかにするするためである。

このような研究の枠組みの中で、まず第一に、近代日本陶磁器業にとって、市場としての重要性が一番高かったといえるアメリカ市場の分析から着手することにした。特に海外における日本陶磁器の需要を考えるために、「上流階級」、「中流階級」、「一般大衆」という需要層の区分を設定し、まずはその中の「上流階級」を分析対象とする。

アメリカ人の「上流階級」を考える場合、造船業や繊維産業などによって富を蓄積し、独立戦争直後からアメリカ経済を牽引していたボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアなどのアメリカ北東部の諸都市がその拠点となる。特にボストンにおいては「ブラーミン」と呼ばれる「教養ある上流階級たち」²の社交活動に注目すべきであろう。このブラーミンたちの人的ネットワークがアメリカ人の日本美術への関心を引き起こすのに大きく作用し、ひいては日本製陶磁器の需要を促進することになったと考えるからである。もちろん、都市文化や大量消費社会の発展とともに、のちにこのような限られた人たちに

よる需要は、アメリカ国中の「中流階級」、「一般大衆」の間にも広がっていくことになることを想定しているが、その出発点として「上流階級」が位置づけられるのである。その部分の分析するため、今回はアメリカ北東部の都市に所在する美術館・博物館、図書館において、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、富裕な「上流階級」によって形成された陶磁器コレクションとその関連史料を調査することを目的とした。

2. 本調査の内容・成果

本調査では、ボストンからバルティモアまでを転々としながら、7 箇所の美術館・博物館、2 箇所の図書館を訪問した。主に美術館・博物館（①～⑦）では、各館が所蔵する陶磁器コレクションを総計 170 点ほど実見、撮影した。また、それぞれの館のアーカイブ部において関連史料を収集した。一方図書館（⑧・⑨）では、19 世紀後半にアメリカで発行されていた美術・インテリア専門雑誌の閲覧、撮影をおこなった。以下、各館における成果をそれぞれ報告する。ただし、館名の右に付した（ ）内は所在の都市名である。

<美術館・博物館>

①ボストン美術館（ボストン）

ボストン美術館が豊富な日本美術品を有していることはよく知られているが、今回はエドワード・シルベスター・モース（1838-1925）、ウィリアム・スタージス・ビグロー（1850-1926）、デンマン・ワルド・ロス（1853-1935）が収集した日本陶磁器コレクションの中から計 16 点を調査した。

モースは明治期の御雇い外国人として 1877 年に来日して以来、蜷川式胤に師事しながら全国で陶器を収集し、5,000 点にも上るコレクションとしてそれをボストン美術館に売却、1901 年にはそのカタログ“Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery”を出版している。彼は博物学者として日本

の陶器を体系的に収集することに意義を見出していたため、自ずとそのコレクションの芸術的価値の低さが批判されてきた。確かに今回調査した作品やカタログに掲載されている作品や見ても、全体的に素朴な味わいのもの、日本人の日常生活の中によく現れるようなものが多い。ジャポニズムに乗じてインテリアとしての装飾的な輸出陶磁器を収集していた他のコレクターたちとは、その目的やコレクションとしての価値が大きく異なる。本研究の趣旨においても、「輸出」陶磁器ではないため、主な対象からは外れる。ただし、ジャポニズムという現象を日本美術に対する大きな「需要」と考える時、モース・コレクションの視点も一つの需要のあり方だと捉えられる。よって本研究では、他コレクターとの比較対象として位置付けており、ボストン美術館をめぐる親交のあったビグローやロスとの比較もこのような視点から今後行う必要がある。

一方、ボストン美術館所蔵のアーカイブからは、モース・コレクションを同館が購入する際に募られた寄附金（計 77,171 ドル）の出資者リスト³を得ることができた。そのほか、日本陶磁器に関して 1900 年代に同館アジア部に寄せられた照会・回答書簡⁴や、1910 年代当時のアジア部所蔵品リストの一部⁵などを収集した。

②ピーボディ・エセックス博物館（セイラム）

同館では、収蔵庫および展示室のコレクションを合わせて 29 点調査した。多くは日本から輸出された皿、茶碗、花瓶、香炉、壺、カップ&ソーサーなどである。「大日本横浜井村造」、「肥 磗山信甫造」、「日肥山深川製」などの銘が確認できるものがあった。中でも横浜井村彦次郎商店のコンポート⁶は、円周 4 箇所に設けられた小さい丸枠の中に西洋風の紋章（家紋か）が描かれている。丸枠内の部分は輸出後に絵付けされた可能性もあるが、日本の陶磁器に紋章を入れたという特定の顧客の要望があったことが推測される。また、婦人花見の画や何種類もの花が器面いっぱいに描かれた横浜保土田製茶碗⁷の裏には「此ノ器ハ他ニ比類ナシ、余ガ丹年困苦ノ末初メテ器ニ寫スナリ、此ノ器ナルヤ実ニ世界無二ノ器ナリ 卅榮山画」とあった。ただし、これらを含めて、今回調査したコレクションが誰の手を経てどのような経緯で同館の所蔵に至ったのかはほとんど不明であった。

③ワズウォース・アセニウム（ハートフォード）

同館では収蔵庫・展示室コレクションから計 22 点を調査した。特筆すべきは、蝶・バッタ・蜻蛉・蟬・はね蟻などの昆虫を描いた茶碗⁸、内面に魚・蛙を、外面に浮彫の鱗をもつ龍を施した茶碗⁹である。いずれも奇抜なモチーフと大胆な構図が印象的であるが、まさにジャポニズムを背景とする欧米人の嗜好を象徴している。また、ティーポット・砂糖

入れ・5 点のカップ&ソーサーから成る錦光山のティーセット¹⁰は、素地は厚く均一性に欠けるが、雀と花草を色とりどりの釉薬であしらった美しい作品である。ティーポットの蓋部に模された鶏の頭もおもしろい。他にも、綿野¹¹、帯山¹²、滝藤¹³、深川¹⁴、井村¹⁵製のものも確認できた。

一方、展示室の藪明山の茶碗¹⁶は、外面に螺旋状の帯に沿って描かれた花、内面にごく小さな蝶が無数に描かれているものである。これはハートフォードの Goodwin 家に伝わっていたもので、同家のレセプション・ルーム（1874 年頃）に飾られていたものと推測されている¹⁷。このような藪明山の細密な絵付けは今回他館の調査でもよく目にしたものであり、19 世紀において高い価値・評価を有していたと考えられる。

ちなみに同館では、ジャポニズムを美術分野にとどまらずアメリカのコンテクストから捉え直すことを目的とした展覧会 “The Japan Idea: Art and Life in Victorian America” が 1990 年に開かれている¹⁸。

④ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス美術館（マサチューセッツ州スプリングフィールド）

ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス（1832-1923）¹⁹ は、コネチカット州ダービーで生まれ、1852 年から 67 年までニューヨークで馬車製造・販売業で財をなした人物である。その成功から、1867 年、35 才という若さで仕事を引退し、ヨーロッパに滞在して美術を学びながらコレクション数を増やした。自身のための美術品収集だけでなく、他のコレクターや美術館への売却もおこなっていたようである。1892 年頃から美術館設立の計画を立て始め、「美術館を開館するのなら」という条件でスプリングフィールド市に全コレクションを寄贈し、1896 年に開館したのがこの美術館である。スミスは 1923 年に逝去するが、彼の死後書簡はすべて処分するよう妻に命じていたため、残念ながら同館に書簡の類は残されていない。しかし、彼がコレクションを購入した際のインボイス（納品明細書）²⁰ が大量に残されており、今回の調査ではそのすべてのコピーを得ることができた。例えば、“Imari Jar (伊万里壺) / 17 世紀 / 150 ドル”、“Satsuma Koro (薩摩香炉) / 1850 年 / 250 ドル” というように、品目・おおよその制作年代・価格などの情報が判明する。これによって 19 世紀後半から 20 世紀初頭のアメリカにおいて、どのような種類の日本美術品が、どの程度の価格で、誰によって販売されていたかを知ることができる上に、陶磁器と他の日本美術品の比較、さらには日本陶磁器と中国陶磁器の比較なども可能となる。これは本研究が目指しているアメリカの日本陶磁器市場構造を解明する上で非常に有用な史料となる。さらに、このインボイスは山中商会、起立工商会社、ヴァンタイン社などのものが大部分を占めて

いる。これらの商社は欧米への日本美術品輸出および現地での販売を行っていたことが知られているが、その現地での販売状況などは必ずしも明らかになっていない。特に明治初期の勸業政策と関連の深い起立工商会社については、日本に残っている史料が少ないため、このインボイスは同社の実態を伝えるものとして史料価値が高い。

また、同館のコレクションのうち、“Satsuma”として分類されていたものの目録(No.1~45、作成年代不明)があり、この中の“Value”の項目²¹を平均すると84ドルである。最も高額なものは錦光山の花瓶400ドルであり、他にも藪明山の濃茶茶碗250ドル、同じく錦光山の茶碗150ドルなどが目立つ。“Kinkozan”や“Meizan”がブランドとして高い価値を有していたのであろうか。

他にも、ランプスタンドとして応用するための日本風花瓶を紹介している、Japanese Fan Company(ニューヨーク)の商品カタログ²²や、東洋美術品で埋め尽くされたジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミスの自室の写真²³などのコピーも入手することができた。

また、コレクションについては計35点を調査した。うち収蔵庫の18点に関しては一つ一つ陶磁器の裏まで確認することができたので、底に価格シールが貼られているものがそのうち11点あることが分かった。今後これらの陶磁器とインボイス、目録を照合することによって、価格とデザインの関係も明らかにし得るだろう。

⑤メトロポリタン美術館(ニューヨーク)

ここでは展示準備のためコレクションを実見することができず、館内データベースのみでの調査となった。そこから、同館が1879年から1946年の間に計34回日本陶磁器の寄贈を受けていることが分かった。その中で一番点数が多いものはチャールズ・スチュワート・スミス(Charles Stewart Smith)の433点²⁴である。同館のコレクションは全体的に近世以前の茶陶などが多い中、彼の寄贈品は装飾的なものを多く含んでおり、宮川香山、清風与平、加藤友太郎など近代の作品もあった。またフィラデルフィア万博で大量の日本美術品を購入したことで有名なハヴェマイヤー(Henry Osborne Havemeyer)・コレクションは、計65点で数量的にそれほど多くなく、少なくとも陶磁器に関しては江戸時代、室町時代のものがほとんどで、近代のものはほとんど見られなかった。

⑥フィラデルフィア美術館(フィラデルフィア)

1876年、フィラデルフィアでは建国百周年を記念してアメリカ最初の万国博覧会が開催され、そこには明治政府の勸業政策に裏付けられて日本から多数の陶磁器が出品された。よって日本陶磁器とアメリカ人との接触の契機として、この万博は非常に重要

なのである。フィラデルフィア美術館はその万博会場の美術館を基礎として翌1877年に開館した。よって同館所蔵の日本美術コレクションは、このフィラデルフィア万博で展示されていたもの、もしくは会場内の売店で販売されていたものを多く含む。今回調査した計15点の陶磁器も然りである。そのうちの8点には、裏に“Jap. 132”などと書かれた楕円形のシールが貼られていた。これは南北戦争の名士であるヘクター・ティンデル(Hector Tyndale)の寄贈品であり、彼がフィラデルフィア万博で買い求めたものである可能性が高い。例えば花鳥草木が美しく描かれた「肥 礪山晴信製」の薄手の蓋付湯呑²⁵などがそれである。

一方、アーカイブ部での調査では、1888年の“American Pottery and Porcelain”展などを企画していた学芸員ダルトン・ドア(Dalton Dorr)などへ寄せられた書簡²⁶、フィラデルフィア万博に係るあらゆる新聞記事を収集した大型スクラップブック²⁷、また同館が所蔵するフィラデルフィア万博関係史料の展示品目録²⁸などを得たが、複写がまだ手元に届いていないためここで詳細な報告することはできない。一点だけ、1876年11月に同館へ薩摩焼茶壺一対を寄贈すると書かれた中島良慶の書簡(日本語)²⁹を発見したことを記しておく。

⑦ウォルターズ美術館(バルティモア)

同館は、父ウィリアム・ウォルターズ(1819-1894)とその息子ヘンリー・ウォルターズ(1845-1931)の二代に渡って形成されたコレクションを所蔵している。父ウィリアムはペンシルヴァニア州リヴァールに生まれ、1841年バルティモアへ移住、1850年代から酒の卸売業で成功した人物である。日本陶磁器との出会いは1862年のロンドン万博でオールコックの収集展示品を見た時であるという³⁰。

今回はウィリアムのコレクションの中から計54点を調査した。また、ウィリアムがフィラデルフィア万博で購入した日本美術品のリストが記された二冊の手帳³¹のコピーを得た。さらに、1878年時点の起立工商会社からのインボイス、1900年パリ博時の新聞記事1点、1904年セントルイス万博時の書簡およびインボイスなどを得た。

<図書館>

1870年代~1880年代のアメリカでは、エステティック・ムーブメント³²を背景に、人々の関心が美術工芸品に注がれ、様々な美術雑誌やインテリア専門雑誌が発行された。今回は、万国博覧会やジャポニスムの影響によってアメリカ人の生活に入り込んでいた日本陶磁器もそれらの関心の対象であったと予測し、以下2箇所の図書館において計4種類の雑誌を調査した。

⑧ボストン公共図書館(ボストン)

“The American Art Review” ボストン、1879年11月創刊

“The Decorator and Furnisher” ニューヨーク、1882年10月創刊

⑨ハーヴァード大学ファイン・アーツ図書館 (ボストン)

“The Art Age, a Journal of Architecture and Fine Arts” ニューヨーク、1883年創刊

“The Art Review, Devoted to Art, Music, and Literature” シカゴ、1870年4月創刊

やはり関心の主流はヨーロッパ美術であり、日本美術に関する記事は全体の比率からして決して多いわけではないが、中国美術に関するものよりは多いと言える。例えば、日本の工芸品を使った室内の飾り方や、日本の寓話・モチーフについて挿図付きで紹介している。また、日本関係の記事以外でも、当時のアメリカ人の生活や理想を読み取ることができ、今後「中流階級」や「一般大衆」について検討していく際にも、このようにアメリカのコンテクストから日本陶磁器に対する需要を見ていくことは非常に重要な視点であると考えている。

3. まとめと今後の課題

今回の調査は、アメリカにおける近代日本の輸出陶磁器に対する需要について、特に「上流階級」に当たる富裕層のコレクションについて分析するための史料調査を目的としていた。特にジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミスやウィリアム・ウォルターズのような個人のコレクションは、当時のアメリカ人富裕層の趣味を如実に表していたし、一番の収穫であったインボイスや関連の書簡およびカタログなどから、市場構造を分析する際の材料を得ることができた。よって、当初の目的は十分に達成できたといえる。

また、コレクション調査として7箇所の美術館・博物館を回ることができたため、アメリカ北東部の都市の日本陶磁器所蔵状況やそれぞれの特徴について大まかなセンスを得ることができた。これは多様なコレクションの中から本研究に最も合致した対象を探し出すという意味で、今後の研究の大きな足がかりとなった。当面は、ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミスおよびウォルターズ父子に注目し、彼らの人物像とともにその需要の傾向を追究する予定である。加えて、今回様々な学芸員、アーキビスト、司書の方々との接点および交流をもつことができ、今後国際的な視野で研究を進めていく上で本調査は非常に有益であった。

課題としては、以下2点が挙げた。第一に、コレクターたちの購入ルートを確認にしなければならないことである。万国博覧会、オークション、ヨーロッパ旅行、来日、山中商会やモリムラ・ブラザー

ズなどの日本人販売店から、などそのルートは多様である。さらに万国博覧会の中でも、会場内美術館の展示品を購入したのか、土産物の感覚で売店でより安価なものを購入したのかも区別しなければならない。このような多様なルートを想定した上で、それぞれの陶磁器がどのような価値を見出されて購入されたのかについて検討を深めていきたい。

第二に、今回の調査でよく目にした“SATSUMA”をどう考えるかである。いわゆる「東京薩摩」や「京薩摩」などと呼ばれる、薩摩地方で焼かれた素地か否かに関わらず、東京・横浜・京都などで「薩摩焼風」の絵付けがなされて輸出されたものが、欧米では一緒に“SATSUMA”と捉えられている。今回の調査品でいえば藪明山、錦光山、保土田などである。これは興味深い事実であるにも関わらず、その生産から輸出までの実態の部分については明らかにされていないことが多い。国内史料も踏まえて今後解明していきたい。

最後に、今回の調査を遂行するにあたって、アマーフト大学のサミュエル・モース先生に多大なご協力を頂いた。心より感謝を申し上げる

注

- 2010年1月、お茶の水女子大学に提出。
- 木村昌人「金ぴか時代の米国東部—ボストン・フィラデルフィア・ニューヨーク」p.21（阪田安雄『国際ビジネスマンの誕生—日米経済関係の開拓者—』東京堂出版、2009年）
- “E. S. Morse Collection, Subscription to purchase” (MFA, AAOA Archive, Pre-1910, M)
- 例えば、Edward G. Clapham から McLean に送られた日本陶磁器関係の英文出版物についての照会・回答書簡（1906年2月20・21日、MFA, AAOA Archive, Pre-1910, C）など。
- Box: “Okakura Tenshin Sorted Papers”; Folder: “Document 6, 1911, The State of the Department Registration + Catalogue of the Dept., Feb + Aug 1911”
- Object number: E50.551.1 (Peabody Essex Museum)
以下、同様に特定の作品については Object number として各館の所蔵番号を示す。
- Object number: 1978.51 (Peabody Essex Museum)
- Object number: 1908.385 (Wadsworth Atheneum)
Constance S. Mead という人物の遺贈品であり、1890年頃に制作されたものと推定される。
- Object number: 1905.958 (Wadsworth Atheneum)
- Object number: 1937.411, 412 (Wadsworth Atheneum)
ただし、カップは4点しか確認できなかった。
- Object number: INV1146.1994, 1917.91 (Wadsworth Atheneum)
- Object number: 1918.983 (Wadsworth Atheneum) 作品の裏に“G. T. MARSH & Co. (Palace Hotel), SAN FRANCISCO”と書かれたステッカーが貼られていた。

販売店の名前であろうか。

13. おそらく Object number: 1918.981 (Wadsworth Atheneum)
14. Object number: 1905.364 (Wadsworth Atheneum)
15. Object number: 1951.341 (Wadsworth Atheneum)
16. Object number 未確認
17. William Hosley “The Japan Idea: Art and Life in Victorian America” (Wadsworth Atheneum, 1990) p.64
18. 展覧会カタログ: William Hosley “The Japan Idea: Art and Life in Victorian America” (Wadsworth Atheneum, 1990)
19. スミスの経歴については、Caroline V. Mortimer “George Walter Vincent Smith: The Man and His Museum” (Partial fulfillment of the Master’s dissertation in the History of the Decorative Arts, Cooper-Hewitt Museum and Parsons School of Design, May 1984) に詳しい。
20. Folder: “A”, “B”, “O” and “Yamanaka”
21. ここに示されている“Value”とは、スミスによる実際の購入価格や陶磁器自体に貼られているシールの価格とは異なる場合が多い。
22. Japanese Fan Company “China-Japan Decorative Arts, Catalogue No.10” (年代不明)
23. Folder: “Mr. Smith’s House interior”, “Smith House Interior- Exterior”
24. 点数に関しては重複しているデータが含まれていたため必ずしも正確な数字ではない。
25. Object number: 97.218, 97.219 (Philadelphia Museum of Art)
26. Board of Trustees Records, Series 3 Initiatives--Subseries A. Exhibitions--1. American Pottery and Porcelain (1888); Dalton Dorr Records, Series 1 Museum letter books [incoming]
27. Scrapbooks, Series 1 Centennial Exhibition
28. 同館図書館でフィラデルフィア万博に関する企画展示が開催中であった。
29. Dalton Dorr Records, Series 1 Museum letter books [incoming], Box1, folder 9, No. 96 1/2
30. “The Taste of Maryland—Art Collecting in Maryland, 1800-1934” Walters Art Gallery, 1984, pp.50-52
31. “Centennial Exhibition 1876 Objects Purchased” (Given by John Walsh, April 1945)
32. 中島朋子「アメリカのエステティック・ムーブメントにおける日本の美術工芸品の受容」(明治美術学会『近代画説』10、2001年、pp.14-32)

いまきいれ かな／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻